

111。10 総決起集会に向けて

我々はアーチ・ド・ガルニエの10回戻りで、一定程度の勝利をおさめた。しかしながらその勝利はあくまで一定程度のものであつた、そして二つ目には敗北である。

新三年の発展の鍵は我々のいかにこれから運動し表現にかかってきている。おおまかに言って我々は構築してゆくからである。第一には我々の個性化した表現運動体とは何でありそれが如何にして最も鮮明にすることは可能なものである。この両者を鮮明にしそれを実体化することの中で初めて新三年の創出は可能となるのである。われらのここを成し切らなければ我らが理事会一大学当局へアンチーとして一時的に攻撃されてもそれは敗北でしかないだろう。ここではこの間の大新三年のおおまかに経過とその結果展に向けて心須のものとなる前述の二つの課題をより鮮明にする方針で述べてゆきたい。

大新斗争の経過とその内容

寺に呼応する斗いを深く、よく学園で至る所で創出せねばなら。い。

これから斗いは、构造的には現在結集している部分の全体の意を一致のものとし、一方では諸々が持ちかかえている個別課題を徹底的に追求・深化し、その内容を相互還流しつつ、他方では、書き手、読手を含めた学友にとって最も重要な矛盾が、何であるかを明らかにしてそれを我々連絡会議に結集する部分が、統一して止場する斗いを組みへ斗いの状況へ拡大していくという重力的るものでなくてはならないだろう。

個別からの矛盾のアプローチと全体からのアプローチの両者が要求されている。斗いは常に重視的でなければならぬこと、一方が欠ければ、必然的にヨイは、自己展開にのみならぬことだ。それそれが、お互に個別からヨイにのみ固執するならば、その矛盾は個別を抱つてヨイ部分とそのヨイの部分の者でしかなく、全員が、全員のものとなりえず、サーカスヘル連ドにとても連ドの二重构造は必然のものとしてある。それはサーカスヘルのマス百日大會における補完物たる「史的」社会的存在から、また、社会文化の社会构造ならぬところからなることである。編集部に叫われた表題主体ヨイ急主体ヒュウ相送はサーカスヘル連ドにとっては研究主体ヨイ急主体としてはね返るべきものとしてあるだろう。ヨイの二重构造は常に目的意識時に追求されるべきだし、持続的にはそれらの中びそれぞれの激烈な対立時は個別性の中で文書通り具体的培養を見えてもらねばならないし、それは才能をもつてあるだけのう。端的に言うなら、連絡会議に結集する部分はお互いの個別性を尊重して、主要な矛盾争盾一例えば、大新、学館、学と値上がり阻止ヨイ社会矛盾に統一して駆けつけ、ヨイに個別にあける培養を探求すべきであるだろう。そしてそのヨイをもつて、交通改善の基づ、深化改革運動としての止場をはならねばならない。当然ながら幼稚・スザンヨイにリツホモを盾くことはできまいし、それらのヨリへのアプローチの中にこそわれわれの政治性、思想性、組織性を發揮せしめるものが含まれてゐるかもしれない。以上の事でわれわれは大新ヨイの何なる内容形態でやりきらねばならないを若干述べていく。

われわれは68~69年の全共斗連ドの事で、大学の犯罪性、社会共同体における学生生存の位置を対象化し、その止場につとめた。『席大解体・自己否定』の説理はそのことを如実に物語っている。われわれは平和と民主主義の虚構を否定し、アカデミズムを拒否し、学内矛盾社会矛盾を鋭くえぐりだし、大学に、体制にアプローチし、一定程度矛盾を明確にし、枚方との緊張関係を保ちつつも具体的にその矛盾を止場することは不可能だった。それはオーバーにわれわれの主体の形成がきわめて具体性の乏しいものでこくなってしまったことであり、われわれは専門家への対応が感性的な部分でしかなかったからである。つまり自己否定の説理にしてみても、自己を対象化したくなるべきである。社会全体において自分を知らざるは相にあり、日本人下向ヨレタリアート、在日朝中人民と如何なる関係にあるのかは感覚的にわれりえてモ、自らの生き方を左右するものとしてはななかつたと言える。真にわれわれが心に居、心に行なねばならないは、具体的な彼らの生活矛盾の接近化にはありえない、されぬまで跡の形成を語つたところで、ほの力にも成り得ぬものである。

大学における矛盾、管理、权力者たる教授、大学当局、被管理者としての学生の間の矛盾ではないし、その連ドは社会的存在なら規定されて、退路を作つた自己完結による壁ではない。持久的な斗争主体の形成は終了段階にぶつかるのではなくむしろ、下向労働者、在日中國人民への寄近の中で始めて可能となるだろう。現在的に、「史的」空手筋労働者地域住民のヨイ、たとえば定期制高校、夜間中學のヨイや臨時工、社外工のヨイを学びつく、神奈川の地域でおきてヨイ労働者のヨイに支援に行くヒュウたわれわれのヨイの質、形態の変革をはなしていくことが必要であるだろう。われわれははつきりと一般大學生ではなく、どの階層の大学生に依拠するかを明確にしなければならない。学内斗争を断固ヨウとするわれわれにとってこそも、地区的な労働者の申から、労

労者との有機的連帯を計るにともに自らの対象化を行なわばならない。現在の段階では、
二重的にしたる二つの形態だけできちりいであつて、われわれは目的意識的に労働者とみなす場合
をしこりぬく、たゞになれば卒業生たちの「社会的被削除性の改めに」としての立場
はくとりの相性は乗りこえ得ないであろう。

われわれは学生の中で自己実現しようとする諸々のヨイの变形態を辨別しならね。今さう
省内斗争の労働者、地域住民との関係の中で意識的につぶやくことからだ。

三、当面の学内斗争の方向性

ればならぬに現実をつくり出発し、現実の中につき矛盾を発見し諸矛盾の運動法則を把え、切ってゆかなければ人民の間にどんぐりを盾が実るか調査分析の手をつけて盾を斗争へと転化せしめろ。これが原則である。一般的に帝國主義の政治遺産を人⺠は宣り表に出してこころで最も矛盾を感じ最も革命的エネルギーをもち、革命の原動力となり得る。民には何の政治的、心理的影響力は持た得ない。大衆は帝國主義の侵略と反革命に向けて一大きな環にて政局に反対し、その矛盾を実力カントニアヨギ争闘する。主導として行動する。政治活動点にして戦う。その形態は今一步百数十歩

学校内に於いては、その形態は政治過程への増員にしての質すのものとされることは、争いも現実の太いもので、その多くは、中から少しありと引き起こすことばかりである。しかし、争いの中から、何千人集まろうとも、矛盾への手が持続しない限り、何の意味も持たない。

アーロンの手で、自らの全生存を祀る。そこで、即ち、自らの存在形態——生存過程を对象化し、自らの生存過程を理解する。これが、アーロンの「自己の生存」とは、アーロンの「自己」である。

するのであり、すり伝わる学生を退路のない自己規制せしめんがたに、自分の生活、存在を社会化し、社会の規範に従事する能力をもつてゐる。この意味では、斗争は構造的には重複して此後もつておこなうとするが、その際に何日何日に自身に参加するのではなく、毎日が子の運営である。諸の創出を自ら、これはならぬ。」

多分に運動ヨリ寄は、運動ヨリ離れてゐる所が、思想的影響を作用する。こゝにその所いか
が眞体として、それ自身として決して自己完結的そのものない。運動ヨリ運動ヨリの
ことでありとても、その中で獲得したものを胸内に墨縛しないから、またそれを保障す
る基盤がないならば根のない草いじらしかながちである。一方におけり地区的斗争の追求
他方にあける學生矛盾の追求、二つ二つの立論的觀察——

われわれは以上のよな觀察から學内斗争に取り組む中で、日常的に帝國主義教育と排
外主義に對決しながら、具化的帝國主義的再編を粉碎し、その中で教育内容も獲得
し、交通形態も獲得し、学生存在を乗り越へえ、そして學生自身が地区一私場への水
路の中に入りこむ、そして、その水路を大駆連(大駆路線)に導みれた中で打算立ててゆき
ばならない。